

シナゴグを訪問した二人の教皇

—— ヨハネ・パウロ二世とベネディクト十六世 ——

木 鎌 耕 一 郎

目 次

はじめに

1. 第二バチカン公会議と *Nostra Aetate*
2. ヨハネ・パウロ二世の取り組み —— *Nostra Aetate* の具現化
3. ベネディクト十六世 —— ユダヤ教との関係の今後
4. ローマの大シナゴグでの声明 (ヨハネ・パウロ二世)
5. ケルンのローンシュトラーセのシナゴグでの声明 (ベネディクト十六世)

はじめに

本年四月に逝去したヨハネ・パウロ二世が、歴代教皇としてはじめてシナゴグ (ユダヤ教会堂) へ訪れたのは 1986 年であった。この歴史的訪問は同教皇による他の数々のユダヤ教との関係改善の取り組みの中でも、とりわけ象徴的な意味を持っていたと思われる。同教皇の後継者として、本年 4 月 19 日に第二六五代教皇に選出されたベネディクト十六世は、この 8 月、在位後はじめて母国ドイツを訪問したが、この機会に、ケルンのシナゴグを訪問した。教理省長官という要職につき、前教皇から大幅な信頼を寄せられていたヨゼフ・ラッツィンガー枢機卿が、教皇に選出されてからわずか四ヶ月後に行ったこのシナゴグ訪問のニュースは、世界中のメディアに取り上げられた。新教皇ベネディクト十六世が、対ユダヤ教関係に積極的に取り組む前教皇の路線を、自らも継承する姿勢を有していることを、教会内外に印象づける出来事であった。

本稿は、二人の教皇によるシナゴグへの訪問を、第二バチカン公会議前後期以降における

カトリック教会とユダヤ教との関係史の中に位置付け (第 1 章)、ヨハネ・パウロ二世のユダヤ教との関係改善の取り組みを概観した上で (第 2 章)、新教皇ベネディクト十六世の経歴と人物像を取り上げることによって、カトリック教会とユダヤ教との関係における今後の課題を探ることにしたい (第 3 章)。最後に、参考資料として、二人の教皇がシナゴグを訪問した際に読み上げた声明を、試訳を以て紹介したい¹ (第 4 章、第 5 章)。

1. 第二バチカン公会議と *Nostra Aetate*

現代のカトリック教会による他宗教との対話路線への転換点は、1960 年代に開催された第二バチカン公会議による教会の刷新にある。公会議公文書における他宗教への言及は、「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての

¹ 両教皇の声明の出典は、アメリカ合衆国のボストン・カレッジ (Boston College) の Center for Christian-Jewish Learning の Web サイト (<http://www.bc.edu/research/cjl/>) に依る。

宣言」(通称 *Nostra Aetate*)²に見られる。この宣言は、ヒンドゥー教、仏教、イスラム教、ユダヤ教などの諸宗教に対する教会の態度が記されている。ユダヤ教に関して記されているのはその第四項であり、これがユダヤ教との関係改善の試みを促す原動力となっている。

Nostra Aetate 第四項では、キリスト教がユダヤ教と同じルーツを持つ霊的な絆に結ばれていることを強調し、最初に啓示を受けたユダヤ人と、「異邦人」であるキリスト者を、キリストが十字架を通して「ひとつ」にされたという信仰を開示している³。また、使徒たちがユダヤ人であったことに留意し、使徒パウロらの引用を以て、ユダヤ教徒とキリスト者がいつの日か、「声を合わせ」「肩を並べて」祈る日が来ることへの希望を表明している⁴。そして、両者の間で「聖書や神学の研究や兄弟的対話」による相互理解を推奨している⁵。さらに、ユダヤ人を誹謗する教育や宣教を戒め⁶、「政治的な理由からではなく、福音の宗教的愛にかりたてられ、ユダヤ教徒に対する憎しみ、迫害、反ユダヤ主義の運動があれば、それがいつ、だれによってなされるものでも、これを嘆き悲しむ」との表現で、如何なる形態の反ユダヤ主義をも非難する姿勢を示している⁷。

この宣言が公布される契機となったのは、第二バチカン公会議を招集した教皇ヨハネ二十三世が、世界ユダヤ人協会の代表者で行った会見にある。ヨハネ二十三世は、第二次大戦中トルコにバチカン大使として赴任していたが、その時期に、外交官の職権を用いてユダヤ人の命を救ったという。ヨハネ二十三世は1958年にピオ十二世の跡を継いで教皇に選出されたが、1960年1月18日に世界ユダヤ人協会の代表者と会

見した際、トルコでの彼のユダヤ人救出の件で、感謝を表明された。また、同時期に、ユダヤ人問題研究者から、反ユダヤ的教えの是正を要請されるという出来事もあった⁸。これを契機に、第二バチカン公会議の草案に、ユダヤ教との関係について盛り込まれることが決まったのである⁹。

周知のとおり、ヨハネ二十三世の前任者であるピオ十二世は、優れた外交手腕を持ちながら、ナチス・ドイツとの間に政教条約を結び、共產主義の侵入を恐れるあまり、ナチスのユダヤ人迫害に対しては十分に手を尽くさなかったとして、戦後非難を浴びた教皇である¹⁰。この「教会の沈黙」への非難は、必ずしも妥当とは言えない点はあるが、ユダヤ人社会からの非難は現在まで後を引いている。

ヨハネ二十三世は、ユダヤ教との関係に凝り

⁸ ジュール・アイザックによる「ユダヤ教についてのキリスト教の輕蔑的教育を廃止するための建白」のこと。竹下節子『ローマ法王』筑摩書房、1998年(180-181頁)を参照。

⁹ 草案作成を担当したのは、1960年に教皇庁に設置されたキリスト教一致推進事務局の局長、ベア枢機卿である。この間の詳細な経緯は、和田幹男「キリスト教とユダヤ教の対話の歩み」『人間文化』第3巻(英知大学人文科学研究室紀要)、2000年(57-71頁)を参照。

¹⁰ ピオ十二世在位中のいわゆる「教会の沈黙」に関わる問題について、最近の文献として次のものが挙げられる。John Cornwell, *HITLER'S POPE: The Secret History of Pius XII*, Penguin Books, 2000.; Michael Phayer, *The Catholic Church and the Holocaust, 1930-1965*, Indiana University Press, 2000.; Ralph McInerney, *The Defamation of Pius XII*, St. Augustine's Press, 2001.; Margherita Marchione, *Consensus and Controversy: Defending Pope Pius XII*, Paulist Press, 2002.; José M. Sánchez, *Pius XII and the Holocaust: Understanding the Controversy*, The Catholic University of America Press, 2002.; Susan Zuccotti, *Under His Very Windows: The Vatican and the Holocaust in Italy*, Yale University Press, 2002.; Peter Goldman, *Hitler and the Vatican: Inside the Secret Archives that Reveal the New Story of the Nazis and the Church*, Free Press, 2004.

² 南山大学監修『第2バチカン公会議公文書全集』中央出版社、1986年の訳を参照した。

³ *Nostra Aetate*, no. 4, 662.

⁴ *Ibid.*, 663, 664.

⁵ *Ibid.*, 665.

⁶ *Ibid.*, 666.

⁷ *Ibid.*, 667.

を残したピオ十二世の逝去に伴って選出された教皇である。就任当時 77 歳という高齢であり、当初はバチカン保守層による妥協的選出と見なされていた。しかし、そのような予想に反して、同教皇は現代社会の変化に対応する教会の刷新と、それまでの他宗教、他宗派に対する排他的態度を抜本的に改革するための公会議を招集したのである。さらに、同教皇は、キリスト教他宗派との関係に注意を払い、ユダヤ教に対しても敬意を示し、ピオ十二世が遠ざけようとしたソ連との対話にも乗り出した¹¹。

第二バチカン公会議当時は、イスラエルとアラブ諸国は中東地域で紛争を繰り返しており、バチカンはまだ、イスラエル建国を承認していない時期だった¹²。そのような国際情勢にありながらも、公会議の宣言に *Nostra Aetate* が盛り込まれた事は、宣言文中に記されているとおり、「政治的な理由からではなく、福音の宗教的愛」¹³ という教会の本質的な動機を物語っていると言えよう。同時にそれは、ピオ十二世以来のユダヤ教との重苦しい関係に転換をもたらす、時宜に合った出来事でもあった。

第二バチカン公会議の途中、1963 年に、ヨハネ二十三世は逝去するが、次の教皇パウロ六世が継続し、同公会議は 1965 年 12 月 8 日に閉幕した。公会議による大胆な改革は、聖職者や信徒の間で反動も引き起こしたが、改革の精神は少しずつ具現化されていくことになる。*Nostra Aetate* の理念も、パウロ六世のもと、教皇庁内に担当部署が開設され、徐々に形をとっていっ

た。すなわち、1967 年 1 月に、キリスト教以外の諸宗教団体との対話を促進する機関として、教皇庁に「諸宗教対話評議会 (Pontifical Council for Inter-religious Dialogue)」が設置され、1974 年には、キリスト教一致推進評議会 (1960 年設置) に「ユダヤ人との宗教的関係委員会 (Commission for Religious Relation with Jews)」が置かれた。この「ユダヤ人との宗教的関係委員会」は、翌年に、『公会議の宣言 *Nostra Aetate* 第四項を応用するための指針と提案』を発表している。

Nostra Aetate の理念の具現化が、より明確に多様な場面で実現されるのは、1978 年に教皇に選出されたヨハネ・パウロ二世のもとである。本稿で取り上げるシナゴークへの歴史的訪問もその一つの現れである。

しかし、後に紹介する二人の教皇のシナゴークでの声明の中で、*Nostra Aetate* 第四項の精神が幾度も再確認されているように、ユダヤ教との関係改善に向けた具体的な行動が実現可能となった背景には、戦中から戦後期の教会内外の情勢と、第二バチカン公会議による改革を源とする継続的な取り組みがあったことは、銘記されねばならない。

2. ヨハネ・パウロ二世の取り組み——*Nostra Aetate* の具現化

1978 年、パウロ六世の後を継いで教皇に選出されたヨハネ・パウロ一世は、わずか一ヶ月で逝去し、次の教皇としてポーランド人のカール・ボイティワ枢機卿が選出され、第二六四代教皇ヨハネ・パウロ二世となった。イタリア人ではない教皇が選出されたのは実に 455 年ぶりであり、ポーランド人の教皇は史上初であった。

第二次世界大戦中にナチス政権による圧政を受け、その後ソ連による共産主義政権の支配下に置かれたポーランドで育ったヨハネ・パウロ二世が、外向的手腕を発揮し、「連帯」と手を携えて母国ポーランドの共産主義政権の解体を実現させたこと、また、その後のソ連崩壊のため

¹¹ マシュー・バンソン著/長崎恵子・長崎麻子訳『ローマ教皇事典』三交社、2000 年 (194-195 頁) を参照。

¹² 当時、アラブ諸国とイスラエル共和国は極めて緊迫した政治的摩擦のただ中にあり、バチカンがイスラエル共和国との国交を結んでいなかった時期でもあり、ユダヤ教への親和的な宣言の公布に対しては教会内部からも反対意見があった。こうした国際情勢との関わりについては、南山大学監修『世界に開かれた教会』中央出版社、1968 年 (581 頁) を参照。

¹³ *Nostra Aetate*, no. 4, 667.

に、大きな影響を与えたことはよく知られている。また、キリスト教諸宗派とのエキュメニズムの推進や、ユダヤ教、イスラム教などとの関係に、歴史的な境地を開いた教皇である。

教皇の出自と個人的な体験は、このような取り組みを精力的にこなすに至った動機を、端的に物語っている。戦時中、ナチス・ドイツに占領されたポーランドで、学生だったカール・ボイティワは、学業を奪われ、ドイツでの強制労働を避けるためソルバイ化学工場の石切場で労働者となった。そして、地下劇場で演劇活動をし、同じく地下の神学校で司祭を志した。当時、ポーランド人の多くの司祭が逮捕された。ダハウの収容所では約三千人が抑留されていたという。また、近所のユダヤ人が連行されていく有様も目の当たりにしている。カール・ボイティワがクラブで神学生をしていた1945年1月18日に、ソ連軍が解放をもたらしたが、それは同時に、彼が司祭となってから長きにわたって対決しなければならなかったポーランド共産主義体制の始まりを意味していた。自伝の中で「戦争の勃発が、私の人生行路を根本的に変えてしまいました」¹⁴と記されているように、カール・ボイティワの司祭への召命は、過酷な戦争体験の中で育まれたのである。そして彼は、教皇ヨハネ・パウロ二世となってからも、その召命を全うする道を選んだと言える。司祭助階五十周年を記念してポーランドの教会に向けて語った次の言葉は、教皇としてのヨハネ・パウロ二世の多様な取り組みの根底にある動機付けを示しているように思われる。

人民と文化とが密接に関わり合っているポーランドの教会は、常に精神的支えであり、とりわけ歴史上の悲劇的な時期には人民を守って来ました。今世紀の過酷な試練を体験した教会でもあります。…中略…この緊張した精神的風土の中で、司教としての私の使命は徐々に形を成して行きました。私たちの世紀は悲劇的な影響を及ぼした二つの完全独裁制——一方では戦争という戦慄と強制収容所に特色づけられたナチズム（ドイツ国民社会主義）、他方では圧政と恐怖という統治方式に特色づけられた共産主義——について、私は、言うなれば内面から分かって来たのでした。ですから、生きる権利に始まる人間一人一人の尊厳に対して深い関心を持ち、人権尊重の必要性を理解することは私にとって容易なのです。この関心は司祭となった初期の幾年かの間に形作られ、時と共に益々深くなってきています。¹⁵

教皇選出の翌年、1979年6月7日に、母国ポーランドへ訪問した際、ヨハネ・パウロ二世はユダヤ人大量殺害が行われたアウシュビッツ強制収容所を訪れ、墓碑の前で頭を垂れ、「この碑銘の前では、誰も無関心に通り過ぎることはできません」と語った。ヨハネ・パウロ二世によるアウシュビッツの訪問は、その後の対ユダヤ教関係への取り組みの出発点となった。

以下、時系列的に、ヨハネ・パウロ二世在任中のユダヤ教との関係改善の取り組みについて、見てみよう。教皇庁キリスト教一致推進評議会の「ユダヤ教との宗教的関係委員会」は、1985年6月24日に「カトリック教会の教説と教理においてユダヤ人とユダヤ教を正しく表現するための覚え書」を発表した。

1986年4月6日、ヨハネ・パウロ二世は、歴代教皇としてはじめてシナゴグを訪問した。ローマの主席ラビのエリオ・トアフが教皇を出迎え、歓迎した。この訪問の場面は、各種メディアで報道された。

1987年5月1日、ドイツのケルンでエディット・シュタインが列福された。ユダヤ人として

¹⁴ ヨハネ・パウロ二世著/斎田靖子訳『怒濤に立つ』エンデルレ書店、1997年（7頁）。同書の別の箇所には、次のように記されている。「私の司祭への召し出しは第二次世界大戦中のナチの占領下の時期に確たる形を取りました。…中略…大戦が召し出しの価値と重要性とを新たな形で私に理解させてくれたのでした。害悪の広まりと戦争の残虐行為に直面して、司祭職の意義と、この世におけるその使命が私には一層はっきりして来たのでした」（30-31頁）。

¹⁵ 同書（73-74頁）

生まれ、著名な現象学研究者となった彼女は、後にカトリックに改宗し、カルメル会の修道女となり、最期はアウシュビッツのガス室で亡くなった人物である。彼女が列福、列聖されたことをめぐり、ユダヤ教からの抗議が起こり、エディット・シュタインに関する両宗教間の議論が各所で行われた¹⁶。ヨハネ・パウロ二世の祖国ポーランドの修道士で、日本での宣教活動でも知られるマキリミリアン・コルベ神父も1982年に列聖されたが、この列聖をめぐっても別の観点からユダヤ教からの抗議が起こった¹⁷。こうした例に見られるように、ユダヤ教との関係改善に向けたカトリック教会のアクションは、細部では必ずしも順調とは言えない状況も散見される。しかし、かえってそうした抗議は、両宗教間の具体的議論の促進につながり、それは抽象的対話論に埋没することを防ぎ、相互理解の助けにもなる。

懸案だったイスラエル共和国との関係にも着手された。1948年に建国されたイスラエル共和国を、バチカンが長らく承認しない立場をとっていたのである。1992年7月29日に、イスラエルとバチカンの外交関係正常化に向けての合同委員会が設置され、1993年12月30日には、イスラエルとバチカンとの関係を定めた15項目

から成る「いくつかの基本原則の合意」に調印した。そして翌1994年、ついにイスラエルとバチカンとの外交関係正常化が正式に樹立した。同年、バチカンではホロコースト追悼コンサートが開催された。1997年には、イスラエル建国50周年を記念して、バチカンで記念点灯が行われた。

1998年には過去の宗教裁判に関するバチカン公文書が公開された。*Nostra Aetate*以降、その理念をより踏み込んで進展させた教会の姿勢は、同年3月16日にキリスト教一致推進評議会「ユダヤ教との宗教的関係委員会」が発表した『わたしたちは忘れない——ショアの反省』¹⁸という文書に現れる。この文書は、西暦2000年に予定されていたキリスト教第三千年紀の大聖年に先立ち、ユダヤ人迫害の歴史を教会の立場から分析し、キリスト教徒がユダヤ人に対して行った過去の罪を公式に謝罪し、その記憶を忘れない義務を宣言するものとなった。2000年3月7日に発表された「記憶と和解——教会の過去と種々の過失」は、対ユダヤ教問題を含むキリスト教徒の過去の過失を認め、現代人もその責任を請け負うことを示し、和解を求めている¹⁹。同年3月12日、教会が犯した過去の罪を認め、ゆるしを願うミサを行い、共同祈願でユダヤ教への罪が告白された。そして、この大聖年において最大の出来事は、ヨハネ・パウロ二世によるヨルダンからイスラエルへの巡礼旅行であった。キリスト教巡礼地の訪問やユダヤ教とイスラム教の代表との会合はもちろんのこと、ユダヤ教の巡礼地「嘆きの壁」で長い祈りを捧げ、壁の割れ目にメッセージを置いた。ヨハネ・パウロ二世は、そのユダヤ人の祈りの

¹⁶ 須沢かおり「エディット・シュタインとユダヤ人問題——列聖への歩み」『キリスト教文化研究所年報』第20号、ノートルダム女子大学、1998年(243-272頁)、拙論「合衆国に見るエディット・シュタイン列聖問題——メディアの反響と宗教間対話の動向——」『八戸大学紀要』第23号、2001年(91-113頁)、ジョン・サリバン編/拙訳『聖なる住まいにふさわしき人——エディット・シュタイン列聖のドキュメント』聖母の騎士社、2002年などを参照。

¹⁷ コルベ神父が生前発行していた『聖母の騎士』にユダヤ人蔑視の記述があったとの理由でユダヤ教諸団体から抗議の声が挙がった。Patricia Treece, *A Man for Others: Maximilian Kolbe Saint of Auschwitz, in the Words of Those Who Knew Him*, Our Sunday Visitor, 1986. を参照。また、「ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の実像」制作 WGBH ヘレン・ホイットニープロダクション(アメリカ1999年)も参照。

¹⁸ ユダヤ教との宗教的関係委員会著/和田幹男訳『わたしたちは記憶にとどめます——ショアを反省して』『人間文化』第3巻(英知大学人間科学研究室紀要)2000年3月(161-175頁)

¹⁹ 教皇庁国際神学委員会著/東門陽二郎訳『記憶と和解——教会と過去の種々の過失』日本カトリック中央協議会、2002年

場でユダヤ人のように振る舞ったのである²⁰。

2001年11月には、教皇庁聖書委員会から「キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書」が発表され、聖書の側面からユダヤの民の契約の意味を探ったこの文書には、ヨハネ・パウロ二世がシナゴグを訪問した際に行った演説の言葉が何度も引用されている²¹。

2003年2月15日には、未公開文書としてバチカン公文書館に保存されていたエディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙が公開された。この手紙はそれまで、エディット・シュタインが、ドイツ国内の反ユダヤ主義的風潮の高まりに対する懸念を時の教皇ピオ十一世に知らせ、ナチスの政策が是正されるための回勅の公布を求める目的で書かれたことが知られていた。未公開だったこの手紙の開示を求めているエディット・シュタインの姪であるスザンヌ・バツドルフは、この手紙の公開について、驚きと喜びをもって受け止めた²²。

ヨハネ・パウロ二世は2005年2月から二度の入退院をし、急速に体調を崩していった。84歳の教皇は、3月27日の復活祭にサンピエトロ広場に集まった信徒たちに向けてメッセージを送ろうとしたが、声を発することができなかった²³。4月2日に逝去し、二十六年間の教皇職在

位を終えた。4月8日に行われたバチカンでの葬儀ミサは、三十万人が広場を埋め尽くした²⁴。同日、日本でも東京カテドラル関口教会で追悼ミサが盛大に行われ、聖堂内に入ることができない参会者のために野外に巨大スクリーンが設置された。

以上見てきたヨハネ・パウロ二世が在任中に行ったユダヤ教との関係改善の試みは、*Nostra Aetate*の具現化そのものであった。その中で、本稿で声明を紹介するシナゴグ訪問の意味について一言しておこう。バチカンの近くにありながら二千年来、歴代教皇がローマのシナゴグを訪れたことは一度もなく、ヨハネ・パウロ二世のこの訪問は正しく歴史的な出来事といえる。キリスト教成立以前からの伝統を有しているというこのシナゴグで、ローマ司教でもある教皇とローマのユダヤ教の主席ラビが集い、ともに聖書朗読と詩編の祈りに与ったのである。*Nostra Aetate*以来、カトリック教会はユダヤ教に対して文書や声明という形態で多くのことを語り、カトリック内部に対してもその精神を何度も喚起してきた。しかしながら、自らの足で教会の代表がユダヤ教の内部に赴き、ともに祈る姿を予想した者は少なかったであろう。この訪問は、言葉の上だけではなくカトリック教会の確固たる意志を顕示するに十分であった。すなわちこのシナゴグの訪問を通して

²⁰ この巡礼旅行についてはミラノ大司教カルロ・M・マルティーニ枢機卿著/平井一子訳「ヨハネ・パウロ二世の聖地巡礼——和解」『神学ダイジェスト』90号01年夏季号、上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会、2001年(89-97頁)を参照。ユダヤ教との関係についても詳しく触れられている。

²¹ この文書の解説として、ヨハネス・ボイトラー著/鈴木伸国訳「キリスト教聖書の中のユダヤの民とその聖書——教皇庁聖書委員会発表の新文書」『神学ダイジェスト』95号・03年冬季号、上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会、2003年を参照。

²² Susanne M. Batzdorff, "A Letter Long Delayed" in *Aunt Edith: Jewish Heritage of a Catholic Saint* (Second edition), Templegate Publishers, 2003, pp. 225-237. 拙論「エディット・シュタインがピオ11世に宛てた手紙」『八戸大学紀要』第28号(105-113頁)を参照。

²³ 『カトリック新聞』(2005年4月3日付)カト

リック新聞社

²⁴ 2005年4月17日付の『カトリック新聞』によると、「ラッツィンガー首席枢機卿が主司式した葬儀ミサは、世界の枢機卿百八十三人のうち百六十四との共同司式だった。ほかに、司教約五百人と赤いストラを着けた司祭三千人も参列していた。世界百四十カ国以上の国王や女王、大統領、首相、大使らが、聖ペトロ大聖堂前に安置されたヨハネ・パウロ二世のひつぎの片側に設置された賓客席に座っていた。日本からは、川口順子首相補佐官(前外相)が参列した。祭壇を挟んだ反対側には、東方正教会や聖公会(英国国教会)、プロテスタント教会の代表者らが着席し、ユダヤ教とイスラムからそれぞれ十人の代表者が派遣され、仏教やシーク教、ヒンズー教の代表者も参列していた」という。

人々は、後に「嘆きの壁」の前で祈りを捧げた教皇の姿と合わせて、ヨハネ・パウロ二世の決意が、単なる友好関係のアピールや過去の清算への関心のみではなく、未来に向けた両宗教の関係を真剣に探る意志と希望に支えられていることを知らしめられたのである。さらにこの訪問は、後を継いだベネディクト十六世がシナゴグを訪問した史上二人目の教皇になったように、宗教間対話における実践の面で、後代の教皇にひとつの方向性を与えたといつてよいであろう。教皇によるシナゴグ訪問は、カトリック教会とユダヤ教との和解にとって単なる前進ではなく、後退を許さない教会の固い決意を象徴しているように思われるのである。シナゴグで行われた教皇の声明は、本稿4章で紹介する。

3. ベネディクト十六世——ユダヤ教との関係の今後

ヨハネ・パウロ二世の葬儀ミサ終了後、4月18日から始まった教皇選挙（コンクラーベ）は翌日19日夕刻にドイツ出身で78歳のヨゼフ・ラッツィンガー枢機卿を選出した。今回の教皇選挙は史上最大規模の52カ国115人の枢機卿によって行われたが、比較的早い選出となった。ラッツィンガー枢機卿はベネディクト十六世を名乗り、第二十六世代教皇の座に就いた。教皇選出を待ちわびていたサンピエトロ広場に集まった十万人近い群集は、聖ペトロ大聖堂中央バルコニーに現れたベネディクト十六世に止まぬ拍手を送り、その様子は世界中に報道された²⁵。一方で、ラッツィンガー枢機卿が次期教皇に選出されたニュースを複雑な思いで受け止めた人々も少なくなかったようである。

ヨゼフ・ラッツィンガーは、1927年にドイツ南部マルクトム・アム・インで生まれ、若くして司祭を志し神学生となるが、第二次世界大戦

中の1943年に徴兵され、米軍捕虜収容所で終戦を向かえた経験を持つ。戦後司祭に叙階され、ミュンヘン大学で神学博士号と教授資格を取得し、フライジング、ボン、ミュンスター、チュービンゲン、レーゲンスブルク大学などで神学の研究にあたった。また、第二バチカン公会議には西ドイツ（当時）のヨゼフ・フリックス枢機卿の神学顧問として参加し、進歩的神学者として評価された。しかしながら、公会議後の混迷に失望し、伝統主義に傾いたと言われ、やがて超保守的神学者と評価されるようになった。1977年にミュンヘン・フライジング教区の大司教となり、同年パウロ六世により枢機卿に親任された。ラッツィンガー枢機卿は、1981年11月25日に教会の正当性を擁護する機関である教皇庁教理省の長官に就任し、以後ヨハネ・パウロ二世のもと、その要職に専念した。その影響力は次第に大きくなり、教会の方向性や重要な事項の決定への影響力は誰にも劣らなかったという²⁶。

そのような影響力は、しばしば超保守の強権発動として見られた。それは、ラッツィンガー枢機卿が、南米キリスト教国で起こった解放の神学運動への強い警戒感と非難を示し、諸宗教対話に携わる幾人もの神学者を破門し、著書の出版停止などを行ったことへの評価である。「ラッツィンガー枢機卿が長官であった教理省から出された文書は、諸宗教、他教会・教派との対話・協力（エキュメニズム）に対するヨハネ・パウロ二世の積極姿勢に暗に修正を加えるような傾向がなきにしもあらずであった」との指摘もある²⁷。今回の教皇選挙で、ラッツィンガー枢機卿が選出されたことに懸念を抱いた人々の脳裏には、教理省長官として行ったラッ

²⁶ 同上

²⁷ 高柳俊一「ベネディクト十六世の登場とそれを取り巻くもの」『ソフィア』第211号、上智大学、2005年（301頁）を参照。高柳俊一氏（上智大学名誉教授）は、バチカン国際神学委員会の委員を務めておられた。

²⁵ 『カトリック新聞』（2005年5月1日付）カトリック新聞社

ツィンガー枢機卿のこうした行為やイメージが浮かんだのである。

宗教間対話の面からとりわけ重要視されたのは、2000年に教理省が発表した『ドミヌス・イエズス』(*Dominus Jesus*)という文書である²⁸。この文書は「キリストの唯一の仲介を超えて神の救いの行動を提示するような解決はキリスト教とカトリック信仰に反する」として、現代の宗教間対話の方向性に潜む相対主義的思想を強く非難している。この文書は、カトリック教会内で宗教間対話に携わる神学者や宣教者に動揺を及ぼしただけでなく、他宗派、他宗教からの反発や不信感を生むことになった。

上智大学の川村信三氏は、教理省長官ラッツィンガー枢機卿が行った幾つかの破門の出来事を仔細に紹介し、『ドミヌス・イエズス』の公布が引き起こした波紋を紹介した上で、ラッツィンガー枢機卿の真意を、公布に当たっての記者会見の言葉を引用して、次のように解釈している。

ラッツィンガー枢機卿の次の発言はきわめて重要であり、これまでの教理省の布告に一貫して流れていたある思想をまとめる内容となっている。(ラッツィンガー枢機卿によれば)「もしも、キリスト教徒が自分自身の信仰の真理を確信していないと、他の宗教についての評価は不合理で矛盾に満ちたものとなる。なぜなら、人はしっかりと一つのことを信じていなければ、他を評価することなどできないからである。(自分の信仰に確信がないなら)何が良いものであり、何が偽りで幻想かを区別することなどできなくなる」と。ここに、私は、ベネディクト十六世となったラッツィンガー枢機卿のキリスト者としての信仰の熱い思いを見出す気がする。信念を説くことを忘れたキリスト者が行おうとする対話の呼びかけを、他宗教の誰がまと

もに相手にするだろうか。…中略…むしろ、「自分にはこういう信念があり確信がある、あなたの信念は何か」と心開く人間に対して初めて人は心を開くのではないだろうか。ラッツィンガー枢機卿のいう「基準」(Criteria)とは、一つのことを懸命に信じることで真の対話が生まれるということなのだろう。そして、忘れてはならないことは、この文書が、キリスト教向け・カトリック信徒向けに書かれていることである。決して、非キリスト者に同じ言葉を語ることはないということである。…中略…『ドミヌス・イエズス』はこれから他者とのコミュニケーションを開始しようとするキリスト者に向けられた、キリスト者の決意を問う文書と解するのが妥当であろう。²⁹

『ドミヌス・イエズス』に代表される現教皇ベネディクト十六世の宗教間対話への理念が、上記のように現代的動向の中に垣間見える相対主義的思想への潮流に対する危機感であるだけでなく、むしろ対話に向かう確固とした立脚点を措定することによって、他宗教との関わりへと邁進する覚悟を述べたものであるとする解釈は、ヨハネ・パウロ二世の姿勢との一貫性を想起させるものである。実際、本稿で紹介するケルンのシナゴークでの声明では、*Nostra Aetate*の引用に加え、ヨハネ・パウロ二世の言葉が幾度も引用されている。そして、キリスト教とユダヤ教の対話について、「この対話は、誠実に

²⁸ 邦訳として和田幹男、アンドレア・ボナッチ訳「教皇庁教理省宣言——イエス・キリストと教会の救いの唯一性と普遍性について——『ドミヌス・イエズス』(翻訳と解説)』『キリスト教文化研究所紀要』第18巻1号、英知大学キリスト教文化研究所、2002年(129-183頁)を参照。

²⁹ 川村信三「ベネディクト十六世と宗教間対話の行方」『ソフィア』第211号、上智大学、2005年(288-289頁)。この論文で川村氏は、1997年におけるスリランカ人のオブレート会ティッサ・パラスリヤ神父の破門(翌年破門は撤回される)、1998年のアジア特別シノドスにおけるインカルチュレーションの議論に対して福音宣教省の伝統的神学を強調する発言、同年イエズス会の霊的指導者アントニー・デ・メロ神父の著作の出版禁止措置、長らくインドで宣教し「宗教多元論」に関する神学者であるベルギー人のイエズス会師ジャック・デュブイ神父の出版禁止措置のケースについて各々詳しく紹介し、それらの出来事に、ラッツィンガー枢機卿をはじめとするローマの神学者による「ヨーロッパ中心神学」と、インドやアジアなどの宣教現場の神学者による「現場(コンテクスチュアル)神学」との溝を見ている(同書276-285頁)。

われるならば、体裁を繕う、あるいは、存在する相違を過小評価すべきではありません。つまり、信仰の深い確信に起因する、実に明確に異なることがらにおいて、私たちはお互いに尊敬を示す必要があるのです」と語ることによって、信仰の確信の自己表明を省くことによる薄浅な友好のポーズを避け、たとえ絶対的相違が明確になろうとも、相互の宗教的信念に基づく直裁的な対話を希望し、促している。ベネディクト十六世によるこのシナゴークでの声明は、上記の川村氏の解釈の妥当性を支持するひとつの根拠になるのではなかろうか。

8月19日に行われたシナゴーク訪問の一部始終は、インターネット上で同時中継された。その映像は今も教皇庁のWebサイトからダウンロードして見るができる。シナゴークの前に止まった黒い車から降りてラビたちの歓迎を受け、聖堂内でスピーチを行うまで、筆者の目には、ベネディクト十六世の表情が終始堅くなっているように見えた。そして、スピーチを終えた後、その表情は少し和らいだようだった。帰り際、シナゴークの出口でラビたちと記念写真をとるベネディクト十六世の顔には、大役を成し遂げたような笑顔があった。

教皇就任からちょうど四ヶ月後に実現したベネディクト十六世のシナゴーク訪問は、ヨハネ・パウロ二世の他宗教との対話路線が今後も継承されるであろうことを内外に印象づけるとともに、前教皇が整えたスタート地点から、より深く込み入った対話の森へと足を踏み入れようとする教会の覚悟を、象徴的に示しているように思われる。

4. ローマの大シナゴークでの声明

ヨハネ・パウロ二世

1986年4月13日

親愛なる、ローマユダヤ教共同体の主席ラビ様、

親愛なるイタリアユダヤ教協会会長様、

親愛なるローマの共同体の会長様、

親愛なるラビの皆様

親愛なるユダヤ教とキリスト教の友ら、そしてこの歴史的式典にお集まりの兄弟の皆様

1. 何よりもまず、私は皆様とともに、主に感謝と賛美を捧げたいと思います。主は、天を延べ、地の基を据え(イザヤ書 51 章 16 節³⁰を参照。)、大勢の子ら——「天の星のように、海辺の砂のように」(創世記 22 章 17 節³¹、イザヤ書 15 章 5 節を参照。)非常にたくさんの子ら——の父にさせるためにアブラハムを選ばれました。古代ローマ時代以来この町で生きつづけているユダヤ教共同体と、カトリック教会の普遍的牧者、ローマ司教とが、この夕べに、皆様のこの「偉大な寺院」で、会合を持つことになりました。感謝と賛美を主に捧げるのは、この御摂理の神秘において、主の善き御意向が働いているからです。

加えて、私は主席ラビのエリオ・トアフ教授に、感謝しなければなりません。教授は、この訪問を実現したいという私の思いを、はじめから喜んで受け入れてくださいました。そして教授は今、非常に寛大な心と深いもてなしの気持ちで、私を受け入れてくださっています。教授に加え、私は、この会合

³⁰ 「イザヤ書」51 章 15～16 節「わたしは主、あなたの神 海をかきたて、波を騒がせるもの その御名は万軍の主。わたしはあなたの口にわたしの言葉を入れ わたしの手の陰であなたを覆う。わたしは天を延べ、地の基を据え シオンよ、あなたはわたしの民、と言う。」なお、注で挙げる聖書の引用は日本聖書協会『新共同訳聖書』の訳を用いている。

³¹ 「創世記」22 章は、神の試しにあったアブラハムが息子イサクを焼き尽くす献げ物にしようとする話である。「わたしは、自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。」(16～17 節)。

を可能にしてくださり、現実的であると同時に象徴的でもある非常に多様な仕方では、仕事を請け負ってくださったローマのユダヤ教共同体のすべての皆様にも感謝いたします。

そういうわけで、皆様すべてに本当に感謝しています。 *Todâ rabbâ* (本当にありがとうございます)。

2. 褒め称えられ永遠に生きる (イザヤ書 30 章 8 節³² を参照。) 神の御言葉の光のうちに、祝福せられし聖なる方の現存 (皆様の礼拝で唱えているように) において、私は、ローマの司教である教皇とユダヤ教共同体との間のこの会合が、皆様にも私にも、とても愛しいこの町で行われるという事実とその意味について、一緒によく考えてみたいと思います。私はずっと前から、この訪問を考えていました。実際に、主席ラビ様は、私がポーランドに隣接するサン・カルロ・アイ・カテナリに司牧に訪れていた 1981 年 2 月に、私のところに会いに来られるほど、寛容でした。さらに、皆様の多くが一度ならずバチカンを訪れ、多くの機会に私はイタリアと世界のユダヤ人社会の代表者たちにお会いすることが出来ました。さらにずっと昔、すなわち私の前任者パウロ六世やヨハネ二十三世、ピオ十二世の時代にも、そうでした。加えて私は、主席ラビ様が、教皇ヨハネが亡くなる前夜に、聖ペトロ広場に足を運ぶことを厭わなかったことを、よく存じています。ラビ様は多くの信心深いユダヤ教徒の方々を随行し、夜を徹して祈るために、カトリックや他のキリスト教徒の群集に交じり、静かに、しかし影響力のある仕方では、この教皇

—— 分け隔てなくすべての人々、とりわけユダヤ人の兄弟たちに心を開かれた —— の魂の偉大さの、いわば証人になって下さいました。私が現在引き継いでいる遺産は、教皇ヨハネのものです。主席ラビ様も言及なさいましたように、教皇は、この近くを通りかかった時、車を止め、ちょうどこの寺院を出てきたユダヤ人の群集を祝福下さいました。私はまさにこの瞬間、彼の遺産を引き継ぎたいと思います。私は今、ただ外にいないだけではなく、皆様の寛大なるもてなしに感謝しつつ、ローマのシナゴグの中にいる自分を見出しています。

3. この集まりは、ある意味で、ヨハネ二十三世の教皇在位と第二バチカン公会議、そしてそこから私たちが相応しい教訓を引き出すべく不断に対応してきた長い時期を経て導かれた、ひとつの結果です。確かに、過去の歴史的状況が、何世紀にも渡り細心の注意のもと、十分に成熟したとは言えないことを、私たちは忘れることは出来ないし、忘れるべきではありません。社会的、市民的、そして宗教的レベルにおいて正しい大多数の人々の全面的な支持を得ることは、多大な困難が伴います。それでもなお、何世紀にも渡る文化的状況を熟慮してみれば、差別の行為、宗教の自由を不当に制限したこと、そしてユダヤ人への市民的自由のレベルでの迫害が、客観的な見地から、重々しく、そして悲しいことに、明らかに存在したことを、悟らされるのです。そうです。「ユダヤ教徒に対する憎しみ、迫害、反ユダヤ主義の運動があれば、それがいつ、だれによってなされるものでも、これを嘆き悲しむ。」これは、よく知られた宣言 *Nostra Aetate* (第四項) の言葉です。今一度、私は、私自身をとおして、そして教会をとおして、「だれによってなされるのでも」という言葉を繰り返します。

³² 「イザヤ書」30 章 8 節「今、行って、このことを彼らの前で板に書き、書に記せ。それを後の日のため、永遠の証しとせよ」

私は、もう一度、先の大戦の間にユダヤ人が被った大量殺戮に対する憎しみの言葉を表明したいと思います。その戦争は、何百万人もの無垢の犠牲者を出したホロコーストをもたらしたのです。

1979年6月7日に、私はアウシュビッツにある強制収容所を訪れ、様々な国の出身の多くの犠牲者のために祈りました。その時私は、とりわけ、ヘブライ語で名前が刻まれた記念碑の前で、足が釘付けになりました。そして、心の中から、次のような感情がわき起こりました。タルソのパウロが言い表しているように、「刻まれたこの言葉は、息子たち娘たちが絶滅へと運命づけられた民(People)の記憶を呼び起こすのだ。この民はその起源を、私たちの信仰の父であるアブラハムにもっているのだ」(ローマの信徒への手紙4章12節³³)と。まことに、神から「汝殺すなかれ」という律法を受けたこの民は、殺戮が何を意味するかを、民自身において、骨の髄まで体験しています。この碑銘の前では、誰も無関心に通り過ぎることはできません。(Insegnamenti, 1979, p. 1484)ローマのユダヤ教共同体もまた、多大なる血の代償を払いました。あの人種迫害の暗い時代に、私どもの信徒の家々の扉、教会の

扉、ローマの神学校の扉、教皇庁に属する建物の扉、そしてバチカン市国の扉が、迫害者に追われるローマのたくさんのユダヤ人たちに、保護や安全を提供すべく開け放たれていたことは、疑いなく、意義深い振る舞いでした。

4. 本日の訪問は、私たち二つの共同体の善き関係を強固にするために、決定的な貢献となることでしょう。古い偏見を乗り越え、ユダヤ教徒とキリスト教徒の間に存在する「きずな」や「共通の霊的な遺産」について、より広く、より深い認識を確固たるものにするために働いてきた、そして今日もなお働いている、双方の多くの男女の例に倣いましょう。

今ここで申し上げましたことは、教会のキリスト教以外の諸宗教との関係に関する公会議の宣言 *Nostra Aetate* の第四項において表現されている希望です。カトリック教会とユダヤ教およびユダヤ教徒との関係における決定的な転換点は、簡潔ではありませんが鋭い、この項目が誘因となりました。

私たちは皆、この *Nostra Aetate* 第四項の内容の豊かさの中に、とりわけ三つの意義深い点があることを知っています。私はそれらの点を、皆様の前で、この実にユニークなこの場において、強く申し上げたいと思います。第一の点は、キリストの教会が、ユダヤ教との「きずな」を「教会の神秘の中に探し求める」ことによって見出す、という点です。(Nostra Aetate を参照。)ユダヤの宗教は、私たちにとって「外的、附带的」ではなく、確かな意味において、私たちの宗教にとって「内的」です。それ故に、私たちはユダヤ教と、他のいかなる宗教との関係にもない関係性を持っているのです。皆様は、私たちの親愛なる兄弟であり、まさしく、皆様

³³ 「ローマの信徒への手紙」4章9節～12節「では、この幸いは、割礼を受けた者だけに与えられたのですか。それとも、割礼のない者にも及びますか。わたしたちは言います。「アブラハムの信仰が義と認められた」のです。どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。それとも、割礼を受ける前ですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受ける前のことです。アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証しとして、割礼の印を受けたのです。こうして彼は、割礼のないままに信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められました。更にまた、彼は割礼を受けた者の父、すなわち、単に割礼を受けているだけではなく、わたしたちの父アブラハムが割礼以前に持っていた信仰の模範に従う人々の父ともなったのです。」

は私たちのお兄さんということができましよう³⁴。

公会議によって示された第二の点は、ユダヤ人に対して、先祖の方々としても、集合的な民としてであっても、「キリストの受難にあたってなされたこと」(*Nostra Aetate* 参照)のために罪を負わせることはできないという点です。当時のユダヤ人であろうと、その後生きる人々であろうと、今日の人々であろうと、同じことです。人種差別的な基準のための、あるいは、もっと質の悪い迫害行為のための、いかなる神学的正当性の主張も、根拠をもっていません。主は、ユダヤ人もキリスト教徒も同じように、「おのおのの行いに応じて」報われるのです。(ローマの信徒への手紙 2 章 6 節³⁵)

私が公会議の宣言の中で強調したい第三の点は、第二の点からの帰結です。教会が自分自身のアイデンティティを知っているにもかかわらず、かつて説かれたように、ユダヤ人が「見捨てられた者とか呪われた者」と語ること、あるいは、それが旧約聖書や新約聖書に由来するなどということ許されません。(Nostra Aetate 参照) 実に、公会議は、

Nostra Aetate の同じ文脈だけでなく、公文書『教会憲章 (*Lumen Gentium*) 第十六章』でも、既に語っています。聖パウロもローマの信徒への手紙 (11: 28-29³⁶) で語っているように、ユダヤ人は神に属しています。神はユダヤ人を取り消されない召し出しによって召されているのです。

5. 私たちの現在の関係は、このような自覚に基礎を置いています。皆様のシナゴグを訪れたこの機会に、私はそのような自覚を再び断言し、それらが永続的な価値をもつものであると宣言したいと思います。これこそが、私が、ローマのユダヤ人の皆様を訪問した理由です。無論、私が皆様のところにいることで、今、私たちの相違が、克服されてしまったわけではありません。私たちは、現在も相違が克服されていないことをよく知っています。何よりもまず私たちの宗教は、互いに結びつく多くのきずなを十分に知ること、そして公会議が語ったあの「きずな」という最初の場所に立って、いかなる習合主義もあいまいな恣意的判断をも乗り越え、お互いに、各々のアイデンティティにおいて認識され、尊重されることを望んでいます。

その上、過去の清算はまだ始まったばかりであると言わなければなりません。それ故、既に双方で為された偉大な成果にもかかわらず、あらゆる種類の偏見、潜在的な偏見をも取り除き、あらゆる自己表現の仕方を見直し、そうしていつでもどこでも、態度や教育やコミュニケーションのあらゆるレベル

³⁴ ここに言う「外的」は extrinsic, 「内的」は intrinsic の訳であるが、「附带的」「本質的」というニュアンスをも含むであろう。「お兄さん」は elder brothers の訳であり、ユダヤ教がキリスト教の年上の兄弟に当たることを明確に示している。

³⁵ 「ローマの信徒への手紙」2 章 6~11 章「神はおのおのの行いに従ってお報いになります。すなわち、忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、反抗心にかられ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります。すべて悪を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、苦しみと悩みが下り、すべて善を行う者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。神は人を分け隔てなさいません。」

³⁶ 「ローマの信徒への手紙」11 章 28~29 節「福音について言えば、イスラエル人は、あなたがたのために神に敵対していますが、神の選びについて言えば、先祖たちのお陰で神に愛されています。神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。」

で、私たち自身と他者に対して、ユダヤ人とユダヤ教の真の姿、そしてキリスト教徒とキリスト教の真の姿を表明するためには、非常に長い時間が必要とされるでしょう。このことに関して、私は、カトリック教会の兄弟姉妹に、そしてローマの人々に、公会議を的確な仕方で履行するためのガイドラインとして、教皇庁のユダヤ教との宗教的関係委員会から1974年と1985年にそれぞれ発行されたふたつの文書³⁷が、すでに誰にでも手に入る状態にあるという事実を、思い出してもらいたいと思います。問題は、これらの文書を注意深く勉強し、それらの教えに身を投じ、それらを実践するかどうかです。

おそらく、私たちの間には、友愛的関係に達するために、乗り越えられるのを待っている実践的な次元での諸困難が存在していることでしょう。それらは、複雑で重大な諸問題において、簡単には片づかない、相互の誤解や、立場や感じ方の相違が何世紀も続いたことに起因します。

誰もが知っていることですが、そもそもの根本的な相違は、私たちカトリック信者が、皆様の民の息子であり乙女マリアから生まれたナザレのイエスの人物と教え、そして原始キリスト教団に偉大な役割を果たした「教会の礎であり柱」である使徒たちと、繋がっていることにあります。しかしこの繋がりは、信仰によって、すなわち精神と心が魂の導きに自由に同意することにおいて成立しているのであり、いかなる意味でも、外的な強制の対象ではありません。だからこ

そ、私たちは、お互いがもつ深い確信を尊重し、誠実さと友情をもって、対話を深めたいのです。私たちが共通に持つ啓示——「偉大な霊的遺産」(*Nostra Aetate*, 第四項参照)としての啓示——という要素を、根本的な基盤として捉えつつ。

6. その上、律法と預言者に由来する共通の遺産の光において、私たちが連携するために開かれている道は、多様であるとともに重要である、と言うべきでありましょう。私たちは何よりも、この国で、いくつもの大陸で、そして世界の至る所で、冷淡ではなく友好的で暖かい、正義が支配する社会、平和——イスラエルの律法学者や預言者や賢者が願った「シャローム (平安)」——が支配する社会において、人間を支えるための連携、その受胎から自然死までの命、尊厳、自由、権利、自己発展を支えるための連携を喚起したいと思います。

より一般的には、道徳性の問題、すなわち個人の倫理、社会倫理という大きな領域があります。この点について、私たちが生きている時代がいかに重大な局面にあるかは、皆が知っています。不可知論や個人主義によってしばしば損なわれる社会、そして利己主義や暴力の悲惨な帰結によって苦難の中にある社会において、ユダヤ人とキリスト教徒は、人間が自己の真理と自由を見出すための掟である十戒に示された倫理の受託者であり、証言者であります。この点での共通の洞察と連携を促進することは、現代の大きなつとめです。

そして最後に、司教団を含むカトリック共同体と主席ラビや権威ある皆さまを含むユダヤ教共同体が共存して生きているこの町に向けて、私はひとつの期待を申し述べたいと思います。私たちの関係を、限定的で不

³⁷ 前者は「公会議の宣言 *Nostra Aetate* 第四項を応用するための指針と提案」という文書、後者は「カトリック教会の教説と教理においてユダヤ人とユダヤ教を正しく表現するための覚え書」という文書のことである。本稿第2章を参照。

定期の会合でもって取り繕うような、単なる「共存」「並置」ではなく、兄弟愛によって生気に満ちたものにしようではありませんか。

7. ローマが抱える問題は、とてもたくさんあります。そのことは、皆様がよくご存じです。私たちはお互いに、私が先ほど触れたような聖なる遺産の光において、それらの解決のために、少なくともいくぶんかは、共に働く責務を自覚しています。共に働くことを、為しうる限り、模索しましょう。私のこの訪問から、そして私たちが得た調和と平穏から、エゼキエルがエルサレムの神殿の東の入り口から湧き上がったのを見た水の流れのように（エゼキエル書 47 章 1 節³⁸）、生き生きとした快活な泉が流れ出すように。その泉は、ローマが被っている傷を癒すのを助けるでしょう。

私はあえて申し上げます。こうすることで、私たちが身を投じている最も神秘的なものに対して、そしてまた、私たちが共に最も奥深く一致団結することに対して、すなわち、「孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛する」（申命記 10 章 18 節³⁹）、そして私たちにも彼らを愛し助けることをお命じになる（申命記同所及びレビ記 19 章 18～34 節⁴⁰）

一なる神に対して、お互いに信頼を寄せましょう。キリスト教徒がこの主の願いを学んだのは、皆様が崇敬するトーラーから、そしてトーラーが命じる愛を徹底的に引き受けたイエスからです。

8. 今、私に残されているのは、私の声明のはじめに述べたように、主に私の目と精神を向け、主に感謝し、主をあがめることです。それは、この喜びに満ちあふれた会合のため、また、そこから既に生じている善きことのため、兄弟であることを再発見し、ここローマの私たちの間と、あらゆる地、あらゆる国の教会とユダヤ教の間の、新しくより深い理解のために、そしてすべての恵みのためにです。

そういうわけで、私は、詩編作者とともに、彼の元々の言語、すなわち皆様が受け継いでおられる言語で、申し上げたいと思います。

hodû la-Adonai ki tob
ki le-olam hasdô
yomar-na Yisrael
ki le-olam hasdô
yomerû-na yir'è Adonai
ki le-olam hasdô

恵み深い主に感謝せよ
慈しみはとこしえに。
イスラエルは言え。
慈しみはとこしえに。
主を畏れる人は言え。
慈しみはとこしえに。（詩編：118：1-2, 4）

アーメン

³⁸ 「エゼキエル書」47 章 1 節「彼は私を神殿の入り口に連れ戻した。すると見よ、水が神殿の敷居の下から湧き上がって、東の方へ流れていた。神殿の正面は東に向いていた。水は祭壇の南側から出て神殿の南壁の下を流れていた。」同 9 節「川が流れて行く所はどこでも、群がるすべての生き物は生き返り、魚も非常に多くなる。この水が流れる所では、すべてのものが生き返る。」すなわち、この箇所では語られる水は、「命の水」である。

³⁹ 「申命記」10 章 18 節「(あなたたちの神、主は) 孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。」

⁴⁰ 「レビ記」19 章 18 節「復讐してはならない。民の人々に怨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人も愛しなさい。私は主である。」イ

エスも同じ掟を説くが、ここでヨハネ・パウロ二世が指摘しているのは、イエスの教えとヘブライ聖書の連続性であろう。

5. ケルンのローンシュトラークのシナゴークでの声明

教皇ベネディクト十六世

2005年8月19日

親愛なる兄弟姉妹の皆様！

主の平安！ 使徒パウロの後継者として選出されてからはじめてのドイツ訪問で、ケルンのユダヤ教共同体とドイツのユダヤ教を代表する皆様とお会いすることは、私の切なる願いでした。この訪問で私は、1980年11月にマインツで行われた、敬愛する前教皇ヨハネ・パウロ二世——それは彼のドイツへの初訪問でした——と、ドイツのユダヤ教中央協議会とラビ協議会の皆様との間でなされた会合での精神に、立ち返りたいと思います。今日、私もまた、教皇ヨハネ・パウロ二世によって与えられた堂々たるお手本に倣って、ユダヤ人との関係と友情の向上に向けた道を継承するつもりであることを、再度主張したいと思います。（2005年6月9日「諸宗教協議会の国際ユダヤ協会の代表団への声明」*L' Osservatore Romano*, 10 June, p. 5を参照。）

ケルンのユダヤ教共同体は、実に、この町をわが家のように感じていることでしょう。ケルンは実際に、ドイツの地ではユダヤ教共同体の最も古い場所であり、ローマ時代の居住区にまで遡ります。ユダヤ教とキリスト教の共同体どうしの関係の歴史は、複雑であり、しばしば痛ましいものでした。両共同体が平和に共存する時代がありましたが、1424年にはケルンからユダヤ人が排除されたこともありました。そして20世紀、ドイツとヨーロッパの歴史のもっとも暗い時期に、新しい異教主義から生まれた狂気の人種的イデオロギーが、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅を企て、それは政治体制によって徹底的に計画され、遂行されました。その結果は、ショアーとして歴史に刻まれました。この筆舌しがたい、想像を超えた罪の犠牲者は、ケルンの人々

だけでも七千名に達します。おそらく実際の数字は、もっと高いはずです。神の聖性はもはや理解されることなく、したがって人間の命の尊厳に対する不名誉が顕わになりました。

今年はナチ強制収容所の解放の六十周年記念の年にあたります。そこでは何百万人ものユダヤ人——男も女も子どもも——が、ガス室と焼却炉で死に追いやられました。尊敬する前教皇がアウシュビッツ解放六十周年の機会に記した言葉を引用して、私も申し上げます。「私は、神祕に隠れた不正の顕示を身に受けたすべての人々の前に、頭を垂れます。」当時の悲惨な出来事は、「終わることなく、良心を目覚めさせ、争いを取り除き、平和の建設を促す」にちがいません。（「アウシュビッツ解放記念のメッセージ」2005年1月15日）私たちは共に、神と、神が創造された世界への賢明なご計画を、忘れるべきではありません。「智書」に書かれているように、神は「命を愛する者」（11章26節）なのです。

今年はまだ、第二バチカン公会議の宣言 *Nostra Aetate* 公布の四十周年記念にあたります。その宣言は、対話と連帯という角度から、ユダヤ教とキリスト教の関係の新しい展望を開きました。この宣言は、第四項において、ユダヤ人とキリスト教徒が共有する共通の祖先と、豊かですばらしい霊的遺産を呼び起こしています。ユダヤ人とキリスト教徒は両者とも、アブラハムを自分たちの信仰の父と理解し（ガラテヤの信徒への手紙3章7節⁴¹、ローマの信徒への手紙4章11節⁴²参照）、モーゼと預言者たちの教えに

⁴¹ 「ガラテヤの信徒への手紙」3章7～8節「だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。」

⁴² 本稿注33を参照。

心を向けています。ユダヤ教の霊性——それはキリスト教徒にとっても同等のもので——は、詩編によって育まれています。聖パウロとともに、キリスト教徒は、「神の賜物と招きとは取り消されない」（ローマの信徒への手紙 11 章 29 節。また同書 9 章 6 節及び 11 節⁴³、11 章 1 節も参照。）ことを確信しています。キリスト教のユダヤ教的根源（ローマの信徒への手紙 11 章 16～24 節⁴⁴ を参照）に関して、敬愛する私の前任者は、ドイツ司教団の声明を引用して、「イエス・キリストに会う者は誰でも、ユダヤ教に出会う」（*Insegnamenti*, vol. III III/2, 1980, p. 1272）と断言しました。

教皇庁の宣言 *Nostra Aetate* は、それ故、「ユダヤ教徒に対する憎しみ、迫害、反ユダヤ主義の運動があれば、それがいつ、だれによってなされるものでも、これを嘆き悲しむ」（第四項）のである。神は私たちを皆、「神の似姿」（創世記 1 章 27 節⁴⁵ 参照）に創られ、そうすることで、私たちを、かけがえのない尊厳あるものとして高めてくださいました。神の御前で、すべての男

女は、民族、文化、宗教が何であろうと、同じ尊厳を持っています。したがって、宣言 *Nostra Aetate* もまた、イスラム教徒（第三項）や他の諸宗教の信者（第二項）を大いに尊重すると語っています。私たちが共有する人間の尊厳に基づき、カトリック教会は「人々の間で、それがいかなる種類のものであろうと、人種や色、階級や宗教の理由でなされる差別や嫌がらせに対しても、キリストの精神と対立するものとして、非難する」（第五項）。教会は、この教えを、第二次世界大戦中とその後に起こった悲惨な出来事を目撃していない若い世代に対して、教会の宗教教育において、また教会生活のあらゆる局面において、伝える義務を自覚しています。このようなことは、特別に重要な努めです。なぜなら、今日、悲しいことに、反セム主義の新しい兆候や、外国人に対する様々な形態の敵意の風潮が起こっていることを、私たちは目の当たりにしているからです。この心配と警戒の種を、私たちはどのように理解することができましょうか？ 私は今日、再び断言します。カトリック教会は、すべての民、文化、宗教の間で、寛容、尊敬、友情、そして平和のために身を捧げます。

⁴³ 「ローマの信徒への手紙」11 章 11～12 節「では、尋ねよう。ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか。決してそうではない。かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは、彼らにねたみをおこさせるためだったのです。彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、まして彼らが皆救いにあずかるとすれば、どんなにかすばらしいことでしょう。」

⁴⁴ 「ローマの信徒への手紙」11 章 16～24 節「麦の初穂が聖なるものであれば、練り粉全体もそうであり、根が聖なるものであれば、枝もそうです。しかし、ある枝が折り取られ、野生のオリーブであるあなたが、その代わりに接ぎ木され、根から豊かな養分を受けるようになったからといって、折り取られた枝に対して誇ってはなりません。誇ったところで、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。……」

⁴⁵ 「創世記」1 章 27 節は、よく知られた天地創造の第六日目、すなわち人間の創造についての記述である。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」

教皇庁の宣言 *Nostra Aetate* が公布から、四十年が経ちました。この間、ドイツにおいて、また世界中で、ユダヤ人とキリスト教徒のよりよい親密な関係に向け、多くの進歩がありました。公的な関係とともに、なかでも聖書学の専門家の間でおこなわれた共同作業に起因する多くの友情が生まれました。このことに関して、私は、ドイツ司教団による様々な声明や、「ケルン・ユダヤ教—キリスト教協同組合」——1945 年以来、ユダヤ教共同体が再びここケルンを「故郷」と感じるために、またキリスト教共同体との良好な関係を築き上げるために尽力してきました——によって為された慈善事業について、言及したいと思います。たくさんの方が今なお、為され続けているのです。私たちはお互いを、もっと多く、もっとよく知るようになるはずです。し

たがって、私は、ユダヤ人とキリスト教徒の間の、誠実で信頼に満ちた対話を奨励します。というのも、このような道によってのみ、争点となる歴史的な諸問題について理解の共有に達することができ、とりわけ、ユダヤ教とキリスト教の関係の神学的発展が前進することができるからです。この対話は、誠実に行われるならば、体裁を繕う、あるいは、存在する相違を過小評価すべきではありません。つまり、信仰の深い確信に起因する、実に明確に異なることがらにおいて、私たちはお互いに尊敬*を示す必要があるのです。

最後に、私たちが注目すべきことは、ただ過去に注意を向けることだけではなく、今日そして明日、私たちを待ちかまえている努めに目を向けることでありましょう。私たちの豊かな共通の遺産と、兄弟的で信頼ある関係は、私たちが、人権の擁護と促進、人間的生活の不可侵、家族の価値、社会正義、そして世界の平和といった実践的なレベルにおいて、仲良く証言し、参与し、共に働くよう呼びかけています。十戒（出エジプト記 20 章、申命記 5 章を参照。）は、私たちが共有する遺産であり、責務であります。十戒は、重荷ではなく、すばらしい人生に導く方途を示す道しるべになります。このことはとり

わけ、若い人々——私は、この何日かの間に彼らと会っています。彼らは私をとっても慕っています⁴⁶。——に当てはまります。私の希望は、彼らが十戒を、自らの歩みを照らす灯火として、彼らの道の光（詩編 119 章 105 節⁴⁷を参照。）として理解してくれることです。大人たちは、若者たちに、神がユダヤ人とキリスト教徒に与えて下さった希望の光を、伝える責任があります。そうすることで、悪の力は「決して再び」勢いづくことはなくなるでしょう。そして未来の世代は、すべての人々が平等の権利を有し、分け隔てなく仲むつまじくより正しく平和な世界を、神の御助けのもと、築くことができましょう。

希望と祈りが表現されている詩編 29 章⁴⁸の言葉で、締めくくりたいと思います。「どうか主が民に力をお与えになるように。主が民を祝福して平和をお与えになるように。」

神が私たちの祈りを聞き入れてくださいますように！

【付記】 本稿は平成 17 年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究 B）「エディット・シュタイン列聖をめぐるカトリックとユダヤ教の宗教間対話に関する研究」（課題番号：16720017）の成果の一部である。

*（原注）教皇ベネディクトによる口頭での声明では、この箇所「及び、愛」という言葉を付加している。

⁴⁶ ベネディクト十六世のドイツ訪問は、2005 年 8 月 15 日～21 日に行われた同国で行われた「世界青年の日（ワールドユースデイ）ケルン大会」に合わせたものであった。世界中からカトリックの青年が集まる。今回のケルン大会は百五十カ国から百万人以上が参加した。日本からは三百一人が参加している。教皇として初めての海外訪問となったこのドイツ訪問期間中に、ベネディクト十六世はシナゴーク訪問の他、イスラム教との対話の機会をもった。『カトリック新聞』（2005 年 8 月 28 日付）を参照。

⁴⁷ 「詩編」119 章 105 節「あなたの御言葉は、わたしの道の光。わたしの歩みを照らす灯。」

⁴⁸ 「詩編」29 章 11 節の言葉。